

## エッセイ (Essay)

## クルミタケ属と物欲センサー

*Hydnotrya* and greed sensor

平尾 知也

Tomoya Hirao

岡山県玉野市

Tamano-shi, Okayama Prefecture, Japan

E-mail: le16144@yahoo.co.jp

Article Info: Submitted: 23 January 2019 Published: 28 March 2019

物欲センサーという言葉がある。欲しがっているときに限ってそれが手に入らず、逆に意識していないときはすんなり手に入る。もしくは熱望している人ではなく頓着していない無欲な人のところにばかり機会が巡ってくる。それはまるでセンサーか何かでこちらの心情を見透かして嫌がらせでもしているようだと言談半分恨み半分で使う言葉だ。見つからないと見たくするのが人の性、見たくなると見つからないのが世の常という話である。

もちろんそんな現象が実際にあるわけではない。願い求めてなお叶わない悔しさと望外にした衝撃が印象に残っただけのことだろう。それでも自然観察を趣味とする人間にとっては共感できるものではないかとも思う。そしてこのような書き出しで始めた以上、当然私には思い当たるところがある。割とうんざりするほどある。その内の一つがクルミタケ属の仲間についてのことだ。

2015年の6月、梅雨入りしたてのこの時期に私は行きつけのフィールドへ出かけていた。まだこの頃は虫草にも地下生菌にも染まりきっていないただのキノコ屋で、純朴な好青年であったと自負している。この日の狙いは梅雨時期のキノコ全般だ。そろそろ菌根菌が出始めているだろうと探しに出てきていた。

しばらく山を歩き回ってたどり着いたのは整備された沢沿いの遊歩道だった。そこは紅葉谷という山溪の自然公園や観光地ならばどこにでもあるような名前の場所で、その名の通り道に沿ってイロハカエデが植えられている。ただカエデー辺倒というわけでもなく、この辺りの主要樹種であるアカマツ、クスギヤコナラなどのブナ科広葉樹もいくつか混じっている。地面は広くコケに覆われているため湿り気を保ち、キノコの発生環境としてはうってつけの場所である。

この日もキアシヤマドリタケの幼菌と黄色いアセタケの仲間を見つけた。アセタケの方はコブアセタケかキイロアセタケかのどちらかだろう。あいにくこの頃はまだ自前の顕微鏡を持っておらず確認のしようがなかった。そもそもそれほど正確に同定

するつもりもないので属で落とすのがこの頃の通例だった。

それでも写真くらいは撮っておこうと屈みこんだところ苔むした緑色の地面から何か顔を見かしているのに気付いた。土の色とも違う赤褐色のそれは触ってみると弾力があり、菌類の類だとわかった。掘り起こして切断してみると外皮よりも鮮やかな赤褐色が美しく、折りたたまれた子実層が見事な模様を作っていた。クルミタケ属の仲間だ (図 1, 2)。

「ジャガイモタケだ！」



図 1. クルミタケ属菌 (2015年6月)。



図 2. クルミタケ属菌断面 (2015年6月)。

しかし先述の通りこの頃の私は地下生菌に明るくなく盛大に勘違いをしていた。図鑑で見た覚えはあったものの別のキノコとごちゃ混ぜになっていたらしい。その場で変色性やヨードホルム様の臭いを確認してみたが当然のことするはずがない。結局間違いに気付いたのは自宅に帰って図鑑を読み返してからであった。

これが私とクルミタケ属との初めての出会いだった。地下生菌に慣れ親しんだ諸兄ならそれほど珍しくもないかもしれないが、地下生菌初心者だった私にとっては興味深い相手であった。せっかく見つけた発生地を大事にして今後も観察を続けようと思い決めたのを覚えている。

その翌年の2016年に発生地が潰れた。珍しく岡山を直撃した雨台風によってフィールドが水浸しになったのである。苔むした地面は大きな水たまりに沈み、さながらアクアリウムの様相であった。いくらキノコに水気が必要と言ってもこれはさすがに多すぎる。結局その年にクルミタケの仲間を目にする事はなかった。

折しも地下生菌識別図鑑を購入したのは同年の秋のことであった。読み進めていくうちに俄然興味が湧いた私はかつて見たクルミタケとの再会を願うようになった。知識を持った上で正確な観察をしたい。安物ながら顕微鏡も手に入れたので特徴的な胞子を見てみたい。そんな思いに駆られ、その翌年の2017年には幾度となく紅葉谷を探し回った。独り地面を這い回る姿はなかなか奇妙であったろうが人目を気にする段階はとうに通り過ぎていたので問題ない。

ただ時折何をしているのかと声をかけられるのはいささか厄介であった。キノコを探しているのだと答えれば「どんなキノコか?」「そんなところに生えているのか?」、果てには「昔はどこそこでマツタケを採った」と話が続くこともままある。そういった会話自体嫌いではないものの、集中して探したいときはどうしても億劫になってしまう。そんなときは「虫を探している」と答えると大概の人は興味なさげに立ち去ってしまうのでおすすめである。なお実際に虫好きな人が話に食いついてきた場合は自前の知識でしのいでいただきたい。

そうして毎週のようにフィールドへ通い、人目も憚らず探し回って一種の名物になりかけてもクルミタケの仲間は見つからなかった。やはり以前の台風で絶えてしまったのか、もしくは変遷して別のキノコに成り代わったのか。黄色いアセタケだけは変わらずに出ているがどうにも癪なので顕微鏡を手に入れた今もまだ検鏡をしていない。

好機が巡ってきたのはさらに翌年の2018年になってのことだ。件のフィールドを地元の研究会で調査する運びになったのだ。多人数での観察となれば当然探す目が増えるし、普段と違う視線が入ることで新しい発見にも繋がる。この調査ならクルミタケとの再会も叶うかもしれない。担当者となった私は全体

のルートを見て回りながら要所要所で地下生菌を探すという調査計画を立てた。会の活動を私物化しているようでもあったが事前の許可申請から終わった後の報告書までこなすのだ。このくらいの役得はあってもよいだろう。

しかして迎えた観察会当日、開始早々に私は認識の甘さを痛感させられた。この日は西日本豪雨の一か月前、キノコの発生量は上々で一同の足を逐一止めてくる。その上メンバーは皆無類のキノコ好きである。誰もが思い思いに動き回り統制がきくものではない。予定時間の半分を過ぎたところで全体の四分の一にも達していない牛歩具合であった。

好き勝手に動き回るメンバーにいささか呆れもしたが、思い返してみれば私自身も案内される側の時は同じように動き回っていたように思う。こういう時に今まで案内役に迷惑をかけてきたのだと反省するか、こうして自分も苦勞したからお互い様だと開き直るかでその人の人間性が垣間見える。ちなみに私は後者だった。

遅れに遅れた進行度合いから私はやむなく想定していたルートを飛ばしあらかじめ目星を付けていたポイントを回ることにした。この際かつてのクルミタケ発生地である紅葉谷は除外した。優先すべきは調査の成功であって出るかどうかも分からない目標に時間を割く余裕はない。とりあえず今回は成果を出しておいて次回以降に繋げた方がいいだろうと打算しての判断であった。

この判断が功を奏してか、そこからの調査はつつがなく進んでいった。私が普段目にしていない種類は大概確認することができただろう。案内人の面目は保たれた。地下生菌に関して見ればアカマツ主体のフィールドらしくアカシヨウロやチチシヨウロが見つかり、ヤシャブシの生える斜面からはアルボバ属の仲間も出ていた。このフィールドでは初めて見るホシミノタマタケ属も見つかったことで調査のいかは十分にあったと言える。

一定の成果に満足しつつ最後に訪れたのはとっておきの地下生菌ポイントだった。遊歩道を挟んで東側にはシリブカガシが植えられウスベニタマタケの発生地となっており、反対の西側ではアラカシ林が広がりアミメツチダンゴなどツチダンゴ属を三種ほど見つけている。調査の締めとして残った時間はここで探索にあてることとなった。

「これがツチダンゴですか?」

「はいそうです。」

「これも地下生菌ですか?」

「そりゃ菌糸に包まれたドングリです。」

といった会話をしつつ、和気あいあいと落ち葉をかいているとメンバーの一人に声をかけられた。これは何かと差し出された手を覗き込むとそこには見覚えのある姿が乗っていた。赤褐色の色合い、歪な球形の表面には内部に続く亀裂が伸びる。探し求めたクルミタケ属菌であった。思わぬ出会いに喜びより



図 3. クルミタケ属菌 (2018年6月).

も驚きの方が強かった。今回は出ないものと諦めていたのも拍車をかける。驚きが落ち着いてからは自分が見つけられなかった悔しさがにじみ出てきたが顔には出さぬよう振る舞った。大人である。

フィールドから戻った我々はさっそく持ち込んだ顕微鏡を設置し細かい同定作業に移った。採取したクルミタケ属を割って断面を見ると隙間の空いた脳みそのようなグレバが特徴的だ(図3)。採取個体はまだ若かったが持ち帰り追熟すると色づいた胞子を検鏡することができた。大きさは22  $\mu\text{m}$ ほどの球形で分厚い胞子外壁に包まれている。正しくクルミタケ属のもので図鑑のみたらし団子の様という記述は実に言い得て妙だ。美味しそうなキノコは数あれど美味しそうな胞子というのはいさうないだろう。また子囊の中に胞子が二列に並んでいることから、クルミタケそのものではなく近縁種であることもわかった(図4)。



図 4. クルミタケ属菌の子嚢胞子 (2018年6月).

念願の胞子観察も行うことができ、最高の収穫でもって調査を終えたのだった。

こうして私は三年かけて探し求めたクルミタケ属に再会することができた。開発や乱獲で発生地が潰されることも少なくない昨今、再び見つけられただけでも恵まれているのかもしれない。今回見つけた発生地もいつまた潰れるかはわからない。もしもまた見つからなくなったときのために採取したサンプルは乾燥標本として大切に保管している。

と思っていたのだが、今見たところ標本をまとめたケースの中に見当たらなかった。確か昨年末に片付けたときには見た覚えがある。さてどこにいったのか。

見たいときに限って見つからない。もっともこれは単に私がだらしないだけの話だろう。